
二、緑島人權文化園區

緑島は台東市の東方、約 33キロメートル離れた太平洋の海上にあり、面積は約 16平方キロメートルで、台湾で 4番目に大きい島です。元々は火燒島（又は鷄心嶼、青仔嶼など）と呼ばれ、島の住民は福建南部出身の漢民族を主としております。

日本統治時代の明治44年から大正8年（1911～1919）に掛け、台湾総督府は緑島に「火燒島浮浪者收容所」を設置しました。昭和12年（1937）、台湾総督府は台東庁台東郡の管轄下に「火燒島庄」を設けました。戦後の1948年に「緑島」と改称され今に至っており、台東県の管轄下に置かれております。

「緑島人權文化園區」は緑島の北東に位置し、面積は 32ヘクタールに及んでいます。前身は保安司令部新生訓導処（1951年～1965年）で、その後国防部緑島感訓監獄（1972年～1987年）に改築され、何れも「白色テロ」時代に長年にわたり政治犯を收容した主要な刑務所でした。

1. 保安司令部新生訓導処時代:

1951年～1965年

緑島に「新生訓導処」を設立したのは、政治犯を收容し思想改造を進めるためでした。1951年以降、台湾全土の政治犯は一小部分が新店安坑にある軍人監獄や軍法所分所に送られた他は、大部分が緑島「新生訓導処」に送られ、集中管理されました。

「新生訓導処」の收容者数は一番多い時で 2,000人に上り、三つの大隊に編成されていました。各大隊は更に四つの中隊に編成され、全部で十二個中隊ありました。一つの中隊は約 120人から 160人で編成されていました。初期の 1951年から 1954年辺りまでは百人ばかりの女性分隊（第八中隊）と中国福建省南日島から捉えられてきた捕虜が監禁されていました。政治犯とその管理に当たる兵隊とを加えると 3,000人ぐらいに上り、優に当時の緑島人口に相当するだけの人数になりました。

初期の「新生訓導処」に收容された政治犯は、昼間は山へ茅を刈りに行ったり、海辺で石を切り取ったりして労働に励み、石垣や石造りの小屋を建てたりしましたが、これらは当時彼らに科せられた重要な建設の仕事でした。

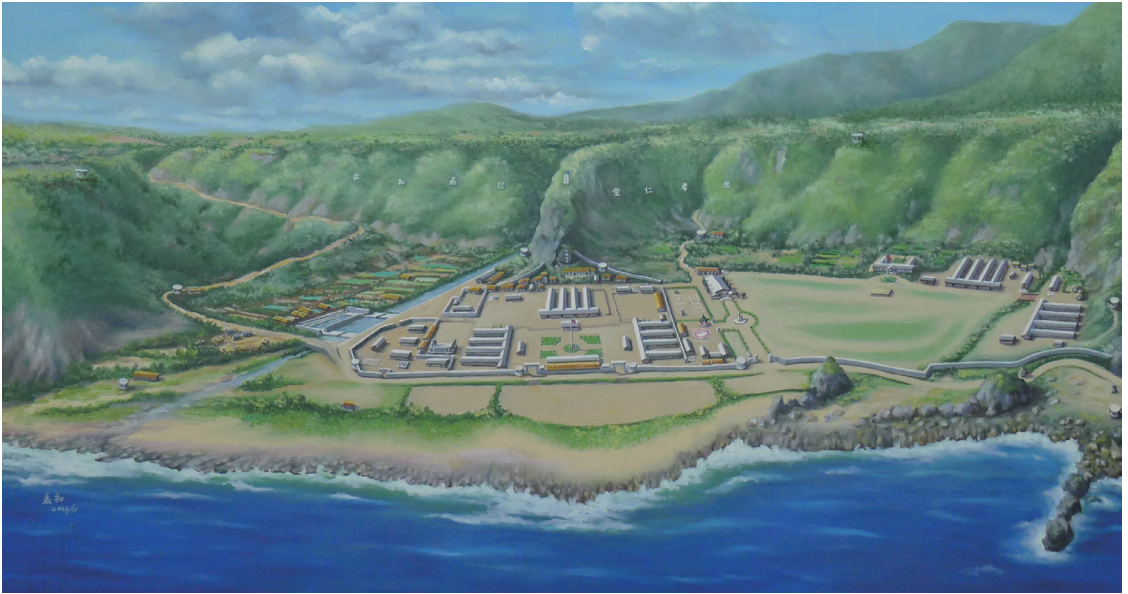
現在残存している石垣は「万里の長城」とも呼

ばれ、「新生訓導処」初期の政治犯が、海辺や山から切り取ってきた石を積み重ねて作ったもので、長さは延べ 1,300メートルに上りました。その頃の政治犯たちはよく冗談半分に「自分たちは世界一の大馬鹿者、自分で石垣作って自分を閉じ込める」と自嘲していたものです。現在もなお園區に残っているのは人間の身長一人半の高さに 60メートルの長さのごく小さな部分の石垣だけです。

「流麻溝」の溪流は新生訓導処の貴重な天然の水源で、全長 3キロメートルに及んでいます。かつては鱸鰻（ロマン）と呼ばれる魚類が棲息していたことからロマン溝と呼ばれていたのが、なまって「流麻溝」になったのだと言われております。1997年以前は、「酬勤水庫」と呼ばれるダムが未だ建設されていませんでしたが、政治犯は設計から造営まですべてを自分たちの手で行い、立派な貯水池やプールを作って、飲用水から、洗い物、洗濯、畑の灌漑、水浴まであらゆる用水の問題を解決しました。たまに運動会が開催される時には、普通入浴に使っているプールで水泳の競技が繰り広げられたものです。

15年の長きにわたって続いた「新生訓導処」は政治犯の管理に際して「思想改造」の再教育方式を採用しました。朝鮮戦争が終結した年（1953年7月）、国防部は新生訓導処で「一人一事、良心救国運動」なるものを発動し、囚われの身の政治犯を強制的に「志願」の形で自分の体に「反共抗ロシア」等の政治スローガンを入れ墨させようとしていました。然しこの様な強制的なやり方は政治犯たちの反感を買い、最終的にはうやむやのうちに失敗に終わりました。

1953年7月、緑島の「新生訓導処」で陳華、楊慕容、呉声達等を主犯とした叛乱案（新生訓導処再叛



新生訓導処全景（陳孟和氏提供のスケッチ）

乱案）が発生、14人の若者が死刑に処せられました。それ以降、服役時の考課で成績不合格と判定された政治犯は、刑期が満了しても「思想未だ改正せず」との理由で、台湾南西海岸の小琉球にある職業訓練総隊に送られ引き続き労役に服したのです。

「新生訓導処」には医務室が付設（1986年改築）されており、政治犯の中の医師らが医療を担当しておりました。医務所での診察は内科、外科、耳鼻咽喉科、産婦人科、眼科等あらゆる分野の医師たちが、管理当局の軍人とその家族、収容されている政治犯、更には緑島の住民にもハイレベルの医療サービスを提供しました。

「中正堂」は往時緑島に駐在する警備総司令部将兵の集会の場所として使われました。当時の緑島住民もここに集まって全島の祝賀活動に参加したり、またはここで催される演芸番組を観賞に来たりしました。

往時の「福利社（売店）」址は、多数の珊瑚礁から切取った石を積み上げて作られた小屋から出ています。福利社入口には三本の古典的形狀の石柱が立っており、壁には半円形の料理送り口、そして入口の両側に一対の聯が掲げられ、それには赤い字で「嘉賓雲集」及び「高朋滿座」と大書されています。

当時福利社は日常用品を販売していただけでなく、クリーニング部や写真部などもあって、いろいろなニーズに対応していたのです。



新生訓導處福利社大門現況



新生訓導處「新生（囚人）」の制服

2. 国防部緑島感訓監獄時代:

1972年～1987年

台東県東河郷にある「泰源監獄」は、1961年に着工され、1965年竣工したもので、落成した直後に、緑島「新生訓導処」に収容されていた政治犯を、数度に分け「泰源監獄」に移管しました。

ところが1970年2月に「泰源事件」が発生し、国防部は急遽緑島の將軍岩に隣接する「新生訓導処」址に高い塀に囲まれた刑務所を建設、1972年に竣工し、正式名称は国防部緑島感訓監獄でしたが、一般には「緑洲山荘」と呼ばれ、泰源監獄及びその他台湾各地に散在している軍事刑務所の政治犯をここに移管しました。現在でも緑島全島を一周するハイウェイの、「將軍岩」脇にある岩石には「緑洲山荘」の四字が刻まれてあるのが見られます。

「緑洲山荘」は典型的な閉鎖式刑務所で、周りには高い塀が聳え立ち、壁には至るところに、「徹底的反共」、「苦の海に際限なし」、「苜に在ることを忘る母れ」、「頭を回らせば岸あり」、「滅共復国」などの政治スローガンが大書されてありました。

「緑洲山荘」は獄舎を主体とした建造物で、六角形の中央台から放射状に4棟の舎房が展開しています。内部は8区に分けられ、大小異なった面積の舎房が52部屋あります。それぞれの区は奥まで続く長い廊下があり、その両脇に舎房が連なっている構造です。そして獄舎周囲の野原が受刑者に許された限られた運動時間の活動の場となっております。緑島の山越え古道から見下ろすと、「緑洲山荘」はさながら地元住民が「八卦」と呼んでいるヤシガニの形状に似通っているので、何時しか「八卦楼」と呼ばれるようになりました。「緑洲山荘」は戒厳令が解除された1987年に大規模な改修が行われたことがあります。

「緑洲山荘」の独房は、建物西側の隠れた獄舎区にあり、受刑者たちから「獄中獄」とも呼ばれています。

「行政大樓」と呼ばれているのは刑務所の運営管理を司る庁舎と面会室とを包含しております。

初期には面会室は家庭のリビングルームの様に円形のテーブルを備えており、来訪した家族と受刑者の面会の場となっております。その外側の「挙善橋」は、往時面会に訪れた家族の人が、受刑者に会うため通らなければならなかった橋なのです。

「緑洲山荘」内には白色テロ時代の関連史料が展示されてあります。舎房の狭い空間には暗く重苦しい空気が漂っており、戦慄を覚えさせられます。それらが既に遠い過去となった現在に於いても、あの重苦しさは消え去りません。獄舎の壁に刻まれた傷跡は、受刑者一人ひとりが受けた傷を思わせ、そして彼らの名前は、この世の生別死別を象徴し、骨身に沁みる痛ましい歴史の傷跡の様にも感じさせられるのです。

「緑洲山荘」のゲート及び面会客の出口は、受刑者のそれぞれが刑期満了で出獄する際に通る最後の壁面でもあるのです。

3. 戒厳令解除後の緑洲山荘:

1987年～

1987年に戒厳令が解除されて以来、国防部警備総司令部に隷属する「緑洲山荘」は「非軍籍」の平民を収容拘置することは出来なくなり、当時40人にも満たなかった受刑者は、全員が法務部（司法省相当）が緑島に設置した「崇徳司法監獄」（台湾緑島監獄）に移動されました。緑洲山荘最後の政治犯とも呼ばれる受刑者には、王幸男、達飛、張化民ら諸氏が含まれています。

国防部最後の政治犯の一味が「新生訓導処」を離れた後、そこは感訓の判決を受けた暴力団員を収容する施設に様変わりしました。同時に、獄舎不足の問題を解決するため、警備総司令部は流麻溝東側の土地を徴収し、そこに「第三職業訓練総隊」を設立し、台湾全土で感訓の判決を受けた暴力団員全員を収容することにしました。

その後、国軍の「勳徳訓練班」も短期間緑洲山荘に進駐しましたが、最後には国防部から法務部に移管し、台湾緑島監獄が運営管理することに



移送一軍人監獄から輸送船で緑島へ（陳孟和氏提供のスケッチ）

なりました。1997年になって、法務部は「緑州山荘」を緑島監獄の支部に変換する計画を立てていました。

ところが1998年に当時の立法委員（国会議員）施明德等 16人が提案し、現状を保留し同時に史料館を創設するよう要求しました。立法委員が現状保留し監獄博物館を設立するよう求めたため、改築の議は中止になりました。

1999年12月10日、緑島「人権記念碑」が落成し、当時の李登輝総統が出席、史上初めて政府を代表して政治受難者に謝罪しました。翌2000年11月24日に行政院は、「緑洲山荘」に史蹟館を設置する企画案を交通部に委任する内閣決議案を採択しました。

2001年から2002年に懸け、交通部観光局は「緑島人権記念園区企画案」を推進、その内容の

重点は二つあり、一つが「人権記念園区総合企画」で、人権記念園区の主題と内容の検討、現存建築物基本資料の調査と保存再利用の初歩企画設計、人権記念園区将来の空間配置、景観、自然生態及び新築必要の建築物の初歩的企画設計等の諸項目を包括していました。

もう一つは、「緑洲山荘史蹟館又は記念館の企画」で、国内外史蹟館または記念館企画事例の蒐集、関連文献及び情報の蒐集と整理、国内外人権事例の蒐集整理を包括していました。そして最後に「経営管理計画」がまとめられてありました。

「緑洲山荘」はその後交通部観光局東部国家風景区管理处によって復元工事が進められ、「監獄博物館」として完成され、2005年台東県政府によって歴史的建築物として登録されました。